

## 南太平洋の風景と地誌を記録する : フォルスター 『世界周航記』の自然のイメージ

その他のタイトル	Recording the Landscapes and Regional Data in the South Pacific Ocean: The Images of Nature in A Voyage round the World by G. Forster
著者	森 貴史
雑誌名	関西大学東西学術研究所紀要
巻	41
ページ	23-36
発行年	2008-04-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/2847">http://hdl.handle.net/10112/2847</a>

# 南太平洋の風景と地誌を記録する

— フォルスター 『世界周航記』 の自然のイメージ —

森 貴 史

## Recording the Landscapes and Regional Data in the South Pacific Ocean:

The Images of Nature in *A Voyage round the World* by G. Forster

MORI Takashi

The book *A Voyage round the World* (1777, 1778-80) by Georg Forster (1754-94) records mainly two images of natural landscape in South Pacific islands. One shows undeveloped Nature as it was, and the other shows Nature with human touch added. These two images reflect two contrasts of *physis* and *techne* from the age of Greece. This was formed by introducing the European cultural phenomena like literally text of Horatius or Homer, or landscape drawing of Salvator Rosa. Forster's use of this method helped readers to see the image of Nature in non-European world, and to follow the writer's experience in the South Pacific islands. However, in Forster's these description of Nature, "garden" or "landscape" was used as a unit, a measuring scale to observe the Nature as a whole. Also, his flexible viewpoint and its dynamic diversion, as he observe and describe the individual item of Nature in microscopic viewpoint as well as using the scales mentioned above, gives his record of the Nature depth and color. We can also see the process of dividing the Nature into parts and organizing it in the text of *A Voyage round the World*. Such method of recording Nature was the foundation of modern geography, and was succeeded by Alexander von Humboldt's "Naturgemälde".

## 1. 啓蒙主義の時代と『世界周航記』

ゲオルク・フォルスター (1754-94) の『世界周航記』<sup>1)</sup> が英語で書かれて、ロンドンで出版されたのは、1777年のことである。この著作は当時としてはかなり読まれたために、その後、フォルスター自身の手からなるドイツ語版 (1778-80) も出版された。この航海記は、フォルスターが父ヨハン・ラインホルトとともに、イギリス海軍所属のジェームズ・クック (1728-79) の第2次世界探検航海 (1772-75) に同行し、無事にイギリスへ生還した体験を叙述したものであるが、18世紀後半という時代のなかで非常に注目されたのだった。

この『世界周航記』というテキストを分析するうえで重要なのは、ヨーロッパの18世紀後期が小説などの散文による著作が増加してくる時代であるのと同時に、いわゆる啓蒙主義の時代であったのを認識することだ。まず自然科学の発達という側面からは、地球の北半球に匹敵するほどの巨大な南極大陸の存在が議論されていたのにくわえて、精確な経度測定を可能にする航海術<sup>2)</sup> および中型高速船の開発といった造船術の発展による航海、非ヨーロッパ世界への知的探究心の昂揚などがあげられるだろう。

思想においては、ジャン-ジャック・ルソー (1712-78) の『人間不平等起原論』(1755) がヨーロッパ文明社会への批判を強くおこなっていた。退廃した (とみなされた) 社会生活に対して、「自然へ帰れ！」というスローガンがルソー主義者たちによって声高らかに叫ばれる風潮は、そのまま啓蒙主義の理念そのものへの批判でもあったのだが、そのような時期に、「エデンの園」ともいわれたポリネシアのタヒチ島の存在がイギリス海軍のサミュエル・ウォリス (1728-95) によって確認される。啓蒙主義は〈理性〉と〈知〉による人類の進歩・発展を謳う思想であるが、タヒチやその周辺の島々では、人びとは文字や文明の利器がなくても、温暖な気候と豊かな農作物で、半裸のすがたで幸福に暮らしていると伝えられたのである。

こうしたヨーロッパの自然科学や思想をめぐる状況は、知の収集を訴える啓蒙主義という追い風に後押しされて、地理学、哲学、人類史を考察するために、新たな情報をひたすら求めていたのである。この時期にもすでに多くの航海記や旅行記は出回っていたが、どれもその記述

1) 本稿におけるフォルスター『世界周航記』は、以下のテキストによる。

Steiner, Gerhard (Hg.): *Werke in vier Bänden*. Frankfurt/M. (Insel) 1967ff.

第1巻『世界周航記』からの本文引用箇所には頁数のみを、その他の巻からの本文引用箇所には、巻数および頁数を附した。

2) 精確な経度測定が可能になれば、海上における自身の位置の特定と、より精密な海図の作図も可能になって、遠大な世界航海の大いなる成果と帰還の可能性が高くなるのである。

に信頼がおけるものではなかった。というのも、この時期の旅行記には、ノンフィクションとフィクションの明確な区別というものが存在していなかったからである<sup>3)</sup>。フィクションの航海記がノンフィクションの航海記の様式を用いて、ファンタジックな記述の信憑性を高めていた時期のことである。フォルスターによれば、「ともかく、小説家たちというのは自分たちの理想に拘泥して、自然人、黄金時代、始原の優越と単純、すべてのものがすべての人間のものであるという先天的な感情を、この世のものとは思えないほどに夢想したがるのが習慣になっていて、いうなれば、かれらはこうしたイメージによる自分たちの甘ったるい夢想を現実世界の描写にも転用したがるのである」<sup>4)</sup>ということになる。

ここに、フォルスターの『世界周航記』がその価値を主張できる背景があるといえよう。フォルスターは自分自身がプロフェッショナルな自然研究者であることと、その観察力と叙述の正確さと公正さについて、以下のように自負していた。

地上のあらゆる民族は、わたしのよき意志にもとづく理解を要求する権利をもっている。そのように考えることにわたしはいつも慣れてきた。[...] それゆえ、わたしの叙述は、普遍的にして最良のものとなるように、つねに顧慮してなされている。わたしの称賛や非難は、いかなる名で呼ばれようとも、ナショナルな先入観とは切り離されたものである。(18)

この引用は、フォルスター自身のペンによる航海記の内容がフィクションではなく、ドキュメントであることを、かれみずから保証しているのである<sup>5)</sup>。すなわち、クックの世界航海に同行したアカデミックな自然研究者が、クックの航海の内容と成果を学術的に記したこと。これこそが『世界周航記』が当時のヨーロッパの知識層に広く読まれた理由であるだろう。

『世界周航記』が描くのは、クックの航海で発生したできごとや事件を時系列にそって配置したエピソードばかりではない。一見すると、副次的と思われるさまざまな事項、自然の描写や自然に関する考察も多く挿入されて、テキスト全体の流れを分断することも少なくない。現代の視点からすれば、その主眼とする部分を読み取ることが困難であって、一種の退屈さを混

3) ポール・アザール (野沢協訳) : 『ヨーロッパ精神の危機1680-1715』、法政大学出版局、1973年、10-33頁参照。

4) Forster, 1967ff. Bd. 2, S. 180f.

5) しかし、『世界周航記』はイギリス海軍のオフィシャルな許可が降りたものではなかった。この経緯については以下を参照。Vgl. Steiner, Gerhard: *Georg Forster*. Stuttgart (Metzler) 1977. S.16f.

じえた非常に読みにくいテキストであるかもしれない。しかし、その原因はつぎのように考えることができる。

フォルスターは、『世界周航記』やそのほかの著述で、文明よりも原始の自然のままの暮らし方を賛美する、いわゆるルソー主義に対して強い不信を示し、徹底した批判をおこなっていたが、ヨーロッパ文明の優位を信じて疑わなかったのは、かれ自身がクックとともに、啓蒙の18世紀を代表する探検航海に参加したことに由来するといえよう。クックの航海そのものが、クック個人の天賦の才能<sup>6)</sup>もさることながら、ヨーロッパ文明の、自然科学の進歩によってなすとげられたものであることを、経験的に知っていたからだ。

だからこそ、『世界周航記』の記述の数々は、ときには逸脱とも感じさせるほどに、地理学、植物学、動物学、哲学、理神論、文明論、くわえて現在でいうところの文化人類学にいたるまでに、広範な範囲にわたっているのである。したがって、『世界周航記』は、啓蒙主義を肯定するひとりの自然科学者によってうち立てられた、18世紀という啓蒙主義時代の世界認識とその拡大の過程、さまざまな学術と科学の進歩の到達点を示すものとしてのマイルストーンでもあるだろう。

本稿では、このような性質を内包した『世界周航記』の自然および風景に関する記述に特化して、その描写の特性を分析し、そのエッセンスを詳述するものである。

## 2. 非ヨーロッパ世界の自然を享受する

これまでほとんどのヨーロッパ人が体験したことのなかった未知の自然の光景を感受し、これをテキストとして再現するフォルスターの方法はたとえば、つぎのようなニュージーランドのダスキー湾周辺を描いた記述にみいだされる。

色の濃い多種多様な常緑樹が、秋の色どりがさまざまに影をおとすほかの木々の葉の緑と、絵のように混ざりあい、非常にこちよいコントラストをなしていた。水鳥の大群が岩の多い浜辺をにぎわしており、陸地のいたるところから、森に生息する鳥たちの奔放な鳴き声があふれていた。[...] 食後のデザートがわりに、眼前におかれているサルヴァートル・ローザでもこれより美しくは描けないかもしれない未開のような風景を、われわれの眼は楽しんだ。(136f.)

6) クック自身の稀有な才能と人格およびその3度の世界航海の意義に関するフォルスターの考察は、以下の著作にまとめられている。Vgl. Cook, der Entdecker. In: 1967ff. Bd. 2, S. 103-247.

なるほど、ここではニュージーランドの豊穡な自然を視覚と聴覚によって感受している体験が描写されているのだが、フォルスターが美の基準のひとつとして援用しているのが、イタリアの風景画家サルヴァトーレ・ローザ（1615-73）の風景画で描かれている自然であることにはやはり着目すべきである。ローザの風景画の性格についてはたとえば、ペネローペ・ホップハウスがローザの風景画〈数人の人物と水浴する人がいる山の風景〉の性質を、「飼いならされない自然 Ungezähmte Natur」<sup>7)</sup> といいあらわしており、この表現はフォルスターが享受している自然を考えるうえで非常に示唆的である。

フォルスターの表現では、このような森林のあり方は「自然がもとのままの未開にして始原の状態にある in ihrem ursprünglichen wilden, ersten Stande der Natur」(139) ということになる。この引用にある「未開の wild」という性質こそは、ホップハウスがいうところの「飼いらされない自然」と共通する意味をあらわしていると同時に、フォルスターが考える自然の内容なの

---

7) Vgl. Hobhouse, Penelope: *Der Garten. Eine Kulturgeschichte*. Starnberg (Doring Kindersley) 2003, S. 230.

である。このwildという語と同様に、『世界周航記』で散見される「ロマンティックな romantisch」<sup>8)</sup>という語も、かれの自然描写の特質を知る糸口を提供している。つまり、グリムのドイツ語辞典によれば、「自然におけるロマンティックなものとは、人間の手によって性格が規定されている見慣れたものに対置されている」<sup>9)</sup>のであって、まさしくwildとほとんど同義の語として用いられており、またローザの描く風景画の自然のイメージとも合致しているだろう。すなわち、フォルスターが意図する自然のイメージは、人間の手がくわえられていない自然なのである。

とはいいいながら、このような自然を、フォルスターがじつは未開の自然としてそのまま体験していないのではないかと思わせる余地が、さきほどの引用に存在している。ローザの風景画をめぐる記述にあった、「未開のような風景 wildnißartig[e] Landschaft」という表現である。このwildnißartigという語の後部を形成している-artigとは、名詞や形容詞の語尾に接合して、性質や種類などをあらわす接尾語である。つまり、かれがじっさいに享受しているのは「未開そのもの」であるはずだが、未開を直接体験しているにもかかわらず、距離をおいた「未開のような」という表現になっている。すると、フォルスターは眼前の風景を未開の風景そのものとしてみていないのであって、まるでタッチや様式として感受しているのではないだろうか。ちょうどローザの絵画の画風を、イギリス式庭園を鑑賞するかのように、である。

これを証明するのが、「絵画的で美しい光景」(291)、「絵画的に美しい」(602)、「絵画的効果」(981)といったように、「絵画的 mahlerisch」という表現が『世界周航記』のなかでよくみられることだ。フォルスターにとって、「絵画的効果」とは、自然の事物が「美しくコントラストをなしている schön contrastir[en]」(373)状態である。「草地のおだやかな緑」、「葉群れのさまざまな色合い」、「名状しがたいほどたくさん木の葉」(797)などの植物、「山々の色」(959)、「険阻な頂上」(253)、「沈みゆく太陽」とこれに照らされた「キラキラ輝く黄金色の雲」(231)といった背景となる自然の事物たち、こうした個別の要素が織りなす色彩のコントラストがひとつの集合体となって、まさしく絵画のように展開しているのを感じているのである。

それは、ウィリアム・ギルピン (1724-1804) がまとめあげた18世紀の美学理論であるところのピクチャレスク<sup>10)</sup>の視点を髣髴とさせるが、フォルスターがこうした視点でみているか

8) Vgl. Forster, 1967ff. Bd. 1, S. 156, 169, 180, 253, 270, 388, 578, 677, 966, 987.

9) Grimm, J. / Grimm, W.: *Deutsches Wörterbuch*. Leipzig (Hirzel) 1893, Bd. 8, S. 1156. ちなみに、テキストにはほかに、「ロマンティックにして未開の romantisch-wild」(578)という表現もある。

10) 「ピクチャレスク」とは、『オックスフォード英語事典』(1989年)によれば、「絵画的なもの、あるいは

からこそ、逆説的にローザの風景画への言及にいたっていると考えられる。これは、かれもまた同時代の美学の影響を受けていることの証左であるが、さらにいえば、「ローザでもこれより美しくは描けないかもしれない」というこの表現は、非ヨーロッパ世界の自然をテキストのうちに再現し、それを読者に追体験させる機能をもつと同時に、ニュージーランドの風景がローザの描く自然の美よりも、もっと高度な美であると読者にイメージさせるのに機能しているということでもある。

同様に、〈援用〉ということでも『世界周航記』をかえりみるとすれば、「[タヒチの]のすべてのものがカリプソの魅惑的な島の記述を思い出させた」(548) というように、文学テキストが少なからず引用されているのにも着目しよう。この「カリプソの魅惑的な島」とは、ホメロスの『オデュッセイア』に登場する女神カリプソがオデュッセウスを7年ものあいだ滞在させた美しい島のことをいっているのであるが、ここでもまた、ホメロスの島の描写を借用することで、読者によるタヒチのイメージ形成に寄与する機能をみいだせるだろう。

とりわけ、フォルスターが積極的に『世界周航記』のなかに取り込もうとしたのが、ホラティウスである。かれの『田園詩』や『頌歌』はローマ時代から長く読まれ続けていたものであって、『世界周航記』でも随所に引用がみられる。たとえば、「ああ、地上のすべての土地のなかでも、あの場所はなんと私にほほえみかけてくることか」というホラティウス『頌歌』の1節を、第16章の「2度目のタヒチ滞在」の冒頭におくことで、フォルスター自身のタヒチの印象をホラティウスのテキストによってシンボリックに語らせるのに効果をあげている。このような言及の方法は、ソサエティ諸島の自然の記述にもおこなわれている。

当然ながら、魅惑にあふれた島についての詩人たちの描写が念頭に浮かんだ。[……。]もしここに水晶のように光る泉やせせらぎが聞こえる小川がありさえすれば、ホラティウスですら、ここより妙をえた隠棲の地を選ぶことはできなかつただろうに。(388)

フォルスターが眼前に広がる風景を描くさいに、この引用は最初に、かれの頭に浮かんだ、

---

絵画的要素をもつもの、印象的あるいは感動的な絵画の主題にかなった」という意味がある。ギルピン自身は、「絵画に適した、特別の種類的美をあらわす用語」と規定している。こうした背景には、18世紀のイギリスでは「美」の規範が揺らぎ始めたために、古典的調和、秩序、均整を特質とする「美」と通じながらも、べつな側面では異なるような美の存在およびその範疇が論議されるようになったことが起因している。柏木智雄／倉石信乃／新畑泰秀、『明るい窓：風景表現の近代』、大修館書店、2003年、77-84頁以下参照。フォルスターがイギリスに滞在していた期間に、「ピクチャレスク」という概念を知っていたとみるのは妥当だろう。



ホラティウスもふくめた詩人たちの描写すべて(!)を引き合いに出しながらも、ソサエティ諸島の自然の美がホラティウスの詩で描写されているものいかに類似しているかを記述することで、やはりホラティウスのテキストを超える自然の美のイメージを喚起している。このインターテクスチュアルな〈援用〉の方法によって、『世界周航記』での太平洋南海の島の描写に用いられているギリシャ・ローマ文学からの引用群が、じつはそれまでの〈島文学〉とでもいべきジャンルに組み込まれるような文学テキストのカタログにもなっているという言い方は、可能であるだろう。

とはいえ、逆にいえば、未知の自然の風景をテキストとして構築するための方法論として、フォルスターがヨーロッパに由来する特定の図像や書字といった文化事象を引用していることは、ヨーロッパ起源のこれらの事象がフォルスターの美の規範として作用していること、くわえて、かれがいかにそれらに拘束されているかということも示しているのである<sup>11)</sup>。

### 3. 自然に秩序をもたらす

「未開の自然」、あるいは「未開のような自然」のなかにフォルスターは美をみだしているが、それはかれの自然の美のイメージのひとつだといえるだろう。『世界周航記』では、もう少しニュアンスの異なった自然の風景についてもまた称賛している箇所が少なくないからである。トンガタブ島の風景描写は、未開でない自然を描出している。

このうしろにある土地は区分けされ、垣根で仕切られていた。両側を竹垣で囲んだ約6フィート幅のせまい道が、[…], 耕作された土地の中央を走っていた。[…], 住民たちの地所の造営や植えつけをいかに多くの秩序が支配しているか、そしてかれらの手仕事がいかに入念であるかをみることもまた、本当に楽しいことだった。[…], そこには、人工的な規則性があるけれども、自然の優雅さと美しさがそなわっていた。(393f.)

トンガタブ島の田園風景の美とは、「秩序 Ordnung」が支配し、「人工的な規則性 künstlich[e]

11) たとえば、フォルスターの同時代人クリスティアン・ルートヴィヒ・フォン・ハーゲドルン(1712-1780)は、その『絵画の考察』(1762)において、典型的な風景のイメージを形成するものとして、サルヴァトーレ・ローザやニコラ・プッサン(1594-1665)の風景画をあげている。Vgl: Busch, Werner (Hg.): *Landschaftsmalerei*. Berlin (Reimer) 1997, S. 181-184, hier S. 181. つまり、プッサンが描く自然は牧歌的かつ調和的であるが、ローザの自然は野生的で荒々しいといった、ふたつの対照的な自然の風景イメージを両者が代表しているのである。

Regelmäßigkeit」をもった自然の美であって、「未開の自然」の美とは明らかに異なっているが、いわば、この人間の手がくわえられている自然もまた、フォルスターにとってはもうひとつの自然の美なのである。

フォルスターが美と感じている「未開の自然」と「人間の手がくわえられた自然」という、このふたつの自然の性質は、古代ギリシャ以来の自然 *physis* と技術 *techné* という二分法の系譜に位置している。それは自然 *Natur* と文化 *Kultur* との対立であって、存在しそのまま維持しているものとして「自然のままである」という自然と、「技術（人間）の介在によってそこに存在する」という文化との対立でもある<sup>12)</sup>。文化 *Kultur* とは *wild* な自然に手をくわえて、「秩序」をもたらしたものであって、すなわち「耕す *kultivieren*」ことでもあるのは、フォルスターにとっても同様で、自然をつくりかえることでもたらされたその秩序が、いわばバロック庭園（フランス式庭園）の幾何学的模様に整形された植木や茂みにみられるような秩序が、美を感じさせているのだ。

自然に秩序をもたらすことの意味を、フォルスターの自然描写の性質と関連づけて考えるうえで、クロード・レヴィ＝ストロースが『野生の思考』（1962）で主張した考え方は有益であるだろう。かれは未開民族にもすぐれた合理性があることを指摘して、「分類はいかなるものでも混沌にまざる。感覚的特性のリズムであっても、それは合理的秩序への一段階である。[...] 分類は、たとえ奇妙で手前勝手なものであっても、豊富で多様な事項の全容を保全する」<sup>13)</sup> と述べている。そして、人間が構築する分類体系は、人間が自然界と人間社会の双方を、秩序あるものとして全体的に把握するための、概念的な枠組みであると規定した。すなわち、分類することこそ、人間によって秩序を生起させる行為であるということなのである。

ニューカレドニアの自然についても、「畑のいくつかは、あぜ道によってこちよく仕切られており *bequem abgetheilt*、すべてが美しい秩序のなかにあった」(852) と記しているフォルスターにとって、眼前に展開する自然を対象として描写すること、そのために対象を分析することが、自然を仕切る (*abteilen*) 行為、秩序を生起させる行為である。このような行為のなかでは、未開の自然の風景そのものもまた、フォルスターの思考を経過することによって、たとえばローザの絵画のイメージ、ホラティウスやホメロスの書字描写のイメージを付与したり、「未開の（ような）自然」や「美しい秩序」という概念を付与したりすることでもあるが、この一連の行為によって、一種、暴力的に変貌させられた自然は、『世界周航記』のテキスト

12) Vgl. Niedermann, Joseph: *Kultur. Werden und Wandlungen des Begriffs und seiner Ersatzbegriffe von Cicero bis Herder*. Firenze (Bibliopolis) 1941, S.15ff.

13) クロード・レヴィ＝ストロース（大橋保夫訳）：『野生の思考』、みすず書房、1976年、20-21頁

のなかに分類／配列されていく。このことは、記述の対象となった自然をテキストとして再構築することでもあって、未知の自然を既知の自然へと変貌させる機能ももっている。すなわち、また、未知の自然を「仕切る」ための手段のひとつであるといえるだろう。

#### 4. 自然を庭園に変える

博物学者フォルスターにとって、「未開の自然」とは、「植物学の十字軍botanisch[e] Creuzzüge」(91)をおこなうことが可能で、新たな動植物のサンプルを発見する期待にあふれている場として意義を有するが、結論としては、「秩序のある自然」のほうを優位にしているようだ。クックの第2次世界航海では、ニュージーランドのダスキー湾に3度滞在しているのだが、本稿2節で引用したようなwildである自然に対して、大いに手をくわえている。あるがままの原野を切り開いて、星の運行データを取るための天文台、船を修理するための鍛冶場をつくったり、ヨーロッパの植物の種子を植えたり、さらには喜望峰からもちこんだガチョウを放したりもしたのだった。

通常は無数の植物がなすがままに繁茂し、ふたたびたち枯れていた荒れた未開の場所 [d]en öden und wilden Fleckを、われわれは120人の男たちがたえまなくさまざまなやり方で作業している、生き生きとした場所につくりかえた。(179)

やはりこの引用でも、「荒れたöde」と「未開のwild」という語によって表現されているのが、人間の手がくわえられていない自然であるのは自明である。ここで注目すべきは、クック一行が船のオーバーホールを終了して、ニュージーランドを離れたあとにたどるであろう、この開拓地を、「もともとの混沌のようなこの土地の状態へとふたたびなりさがる」(181)と記述していることだ。この危惧の感情は、その地の自然の「混沌のようなchaosgleich」状態がけっしてふさわしいものでなかったことに発しており、それを混沌／無秩序Chaosとしてとらえているのである。

人間が手をくわえたこの自然の空間を、フォルスターが好ましく感受しているのは、既述のトンガタブの田園描写についても同様であるが、かれが南太平洋諸島の自然をみるばあいに、「庭園Garten」や「農園Plantage」を非常に意識していたふしがある。

ヘルマン・パウルの辞書によると、そもそもGartenというドイツ語そのものが「囲われた

空間 ein gefriedigter Raum<sup>14)</sup> という意味をもっており、この語が由来するギリシャ語もまた、「垣(柵)で囲われた場所 eingehogter Platz<sup>15)</sup>」という意味があった。すなわち、Garten という語が「囲われた」という意味をもっていることには大きな意義がある。囲われている土地や自然とは、wildな自然を künstlichな自然につくりかえて分節化したものであるからである。それは、前述のレヴィ＝ストロースがいうところの分類の発想と軌を一にしており、分類することは分節化すること、つまり人間が手をくわえることでもある。これによって、自然のなかに秩序を生起させる、庭園や農園としての加工された自然の状態をつくりだすことが可能になるのである。そのことを如実に示すのは、ナモッカ諸島のある島の描写である。

多種多様な植物がその土地をあふれんばかり奔放におおっていて、すべての種類の植物が植わっているために、その島全体が美しい庭園にみえた<sup>16)</sup>。

この引用そのものは、フォルスター自身の文章ではない。クリスティアン・カイ・ローレンツ・ヒルシュフェルトの『造園術理論』(1779-1785) 第1章からの引用である。ヒルシュフェルトが1777年刊の英語版『世界周航記』の1節を自分でドイツ語に訳したものである。この箇所を確認してみると、ドイツ語版『世界周航記』では必ずしも「美しい」という語を用いてはいないのだが<sup>17)</sup>、英語版ではたしかに「美しい庭 a beautiful garden<sup>18)</sup>」と記している。

島をまるごと庭園とみなす、この書き方は、トンガタブ島についてもおこなっていて、「トンガタブはいわば端から端までひとつの大きな庭園のようである」(668) と描写している。そのことはすなわち、フォルスターにおいては、非ヨーロッパ世界の自然を享受するさいに、すでにヨーロッパの美しい「庭園」という自然のあり方がひとつの美の基準としてかなりの影響力をもって機能していることを明示している。かれはフレンドリー諸島近在のナモッカ諸島やトンガタブ島を描出するさいに、ヨーロッパの庭園のイメージを付与することで、これらの島

14) Paul, Hermann: *Deutsches Wörterbuch*. (3. Aufl.) Halle/S. (Max Niemeyer) 1921, S. 182f.

15) Paul, 1921, ebd.

16) Hirschfeld, Christian Cay Lorenz: *Theorie der Gartenkunst*. [Reprint] Hildesheim, Zürich, New York (Georg Olms) 2003, Bd. 1, S. 115.

17) ちなみにドイツ語版での該当箇所は以下のとおり。「繁茂した木々がその島全体をすっかり庭園のようにしていた [... die häufig angelegten Baumpflanzungen machten die ganze Insel durchaus einem Garten ähnlich.]」。Vgl. Forster, 1967ff. Bd.1, S. 654.

18) Vgl. Forster: *A Voyage round the World. Georg Forsters Werke. Sämtliche Schriften, Tagebücher, Briefe*. Berlin (Akademie) 1968, Bd. 1, S. 438.

を描出することに成功にしているのだ。

これは逆説的に考えれば、フォルスターが好ましいと考える庭園の様式に、これらの島の自然が偶然に合致していたとも考えられるのであるが、いずれにしても、博物学者であるかれにとっては、好ましい自然の対象として受容されているということになる。しかも興味深いのは、フォルスターが描写したところの非ヨーロッパ世界の自然が、同時代の造園術理論家ヒルシュフェルトに注目されるほどのものであったことだ。この事實は、自然をみるさいに、ヨーロッパの庭園を一定の尺度として感受するのが、ある程度一般的であったことを示唆しているように思われる<sup>19)</sup>。このばあい、18世紀後半という時代をかながみれば、風景庭園（イギリス式庭園）とバロック庭園（フランス式庭園）というふたつの庭園が基準となっていたと考えられるだろう。

## 5. 自然を測量する

フォルスターがなす自然の叙述には、さまざまなヨーロッパの文化事象のイメージを付与していること、ヨーロッパの庭園が自然のイメージの尺度としてかなり機能としていることを述べてきたが、じっさいに、自然を分節化／分類し、テキストとして記述していく方法はたとえば、つぎのようなニューカレドニアの火山の風景の感受とその描写から看取できる。

高台はいくつもの場所で非常に険阻であるにもかかわらず、われわれはいたるところで快適な小道をみいだした。岩石は一貫して竈石、つまり石英と雲母の混合物から構成されており、それは鉄の微分子で彩られる割合が多いときもあれば、少ないときもあった。[…] 高く登れば登るほど、われわれはそれだけますます多くの異なる種類の灌木に出会った。(837)

この記述は、フォルスターが火山を登りながら、眼前の光景をつくりだしている自然の事物のひとつひとつを、密接な距離から分析していく過程が記されている。そして、ついに火山の頂上に到達したときの描写が続く。

19) ジョン・プレスト（加藤暁子訳）：『エデンの園 楽園の再現と植物園』、八坂書房、1999年、11-20頁参照。そもそも、ヨーロッパでの庭園の起源が「エデンの園」という聖書モチーフに帰着することを考えれば、庭園というイメージあるいは記号そのものが本来的に、ヨーロッパにおける空間認識の基準として強力に作用していたともいえるだろう。

この立脚地の高さは、眺望するのになみならず好都合であった。蛇行する小川、栽培地、平地で散在する住居、樹木と森林地の多種多様なグループが、底のみえない海のさまざまな色をともしつつ、海の砂地の浅瀬とならんで、それらがひとまとまりとなって、このうえなく美しい絵画のひとつをつくりあげていた。(838)

空間を分類すること、すなわち空間を囲って仕切っていく、まるで絵画のフレームの枠のように切り取っていくことは、空間を認識する最初の段階である。本稿の前半部で論じたように、フォルスターが「絵画的」に自然を把握しているのは、この引用でも明らかであるが、ここで重要なのは、視点の変化である。火山を登っていくさいには、その途中にある自然の事物について詳述していくのだが、その頂上では一転して、俯瞰的な視点のもとで、自然のコントラストをめぐるパースペクティブな描写へと転換している。この過程のなかで、自然はその構成要素が細分化され、個別に分類／分析されていくその一方で、構造的／総体的にも把握されていく。そして、このような視点の転換こそが、書字で表出される経験的空間を豊かにし、奥行きをあたえるものとなっている。それゆえ、フォルスターにとっては、風景もまた、いわば自然をとらえるひとつの単位となっているのだ。

したがって、『世界周航記』において、南太平洋の島を描写するさいには、島のさまざまな自然のみならず、その住民の生活状態、風俗、文明度、国の体制、宗教、性格的特性などの考察も一定の図式によって記述されていることを加味するならば<sup>20)</sup>、住民をめぐる記述は人文地理学として規定されるのであって、その一方、本稿で論じてきたフォルスターによる自然の記述はまさに自然地理学として規定されうるだろう。まさに『世界周航記』とは、人文地理学と自然地理学というふたつの地理学を統合したテキストであるともいえるだろうか。

ミクロの視点およびマクロの視点といえるような複数の視点から自然を感受し、自然全体を構成している事物ひとつひとつを分類しながらも同時に、総体としての自然のデータも集積していくといった、フォルスターの自然記述の方法は、『世界周航記』の自然描写の本質なのである。

フォルスターがおこなっていた自然の認識および把握の方法は、じっさいに近代地理学の祖形でもあったといえる。というのは、その方法論は、かれの弟子にして友人であるアレクサン

---

20) Vgl. Neumann, Michael: Philosophische Nachrichten aus der Südsee. Georg Forsters *Reise um die Welt*. In: Schings, Hans-Jürgen (Hg.): *Der ganze Mensch. Anthropologie und Literatur im 18. Jahrhundert*. Stuttgart, Weimar (Metzler) 1994, S.517-544, hier S.527ff.; Steiner, Gerhard: Georg Forsters ›Reise um die Welt‹. In: 1967ff. Bd.1, S.1015-1039, hier, S.1031f.

ダー・フォン・フンボルト（1769-1859）によって継承されるからである。フンボルトは、さらなる測量機器や測量方法が発明される19世紀に、より詳細な測量データを風景画面中に配列し、断面図まで描き込んだ「自然描画Naturgemälde」として完成していく。「自然描画」とは、いわば宇宙に存在する恒星規模の自然から、地球上の人間や動植物といった個別の対象にいたるまで、自然の事物やさまざまなエネルギーを同時に存在する自然全体として考察するとともに、そのさいに自然から感受した感情をも叙述すること<sup>21)</sup>をめざすものであった<sup>22)</sup>。

フンボルトはその畢生の大著『コスモス』（1845-1862）で、フォルスターのことをこのように記している。「かれ〔フォルスター〕によって、比較民族学と比較地域研究とを目的とする科学旅行の新時代がはじまった」<sup>23)</sup>。かくして、フォルスターから受け継いだフンボルトの「自然描画」の構想はさらには、動植物の分布、気候、風土などの地理的要因との結びつきを考察するという、のちの近代地理学の基礎となっていたのだった。

---

21) こうした風景享受もまた、フォルスターによる風景の記述という問題にとって、じつは重要な要素であるが、本稿では詳しく触れない。しかし、たとえば、ダーウィンのブラジル奥地での体験について伝える以下の書簡の内容は、その重要性を認識させてくれるだろう。「ここで私は初めて、壮大で崇高な本来の姿の熱帯雨林を目にしました。現実に見なければとうていわからないでしょう、その光景がどれほど素晴らしく、荘厳であるか……。これほど強烈な喜びを感じたのは初めてです。私は以前からフンボルトを賛美していましたが、今ではほとんど崇拜しています。熱帯地方に初めて足を踏み入れた人間の胸にこみ上げてくる感情を、いくらかでも伝えることができるのは、フンボルトだけです」〔ピーター・レイビー（高田朔訳）『大探検時代の博物学者たち』、河出書房新社、2000年、38-39頁〕。

22) とはいえ、これだけの巨大な構想は当然ながら、その個別のデータ群を全体性との関係へと統合していくには非常に遠大な作業が必要となる。結局のところ、『コスモス』は5巻まで膨れあがったが、その長所となる膨大なデータ量ゆえに完成することはなかったのである。エンゲルハルト・ヴァイグル（三島憲一訳）『近代の小道具たち』、青土社、1990年、303-304頁参照。

23) Humboldt, Alexander von: *Kosmos. Entwurf einer physischen Weltbeschreibung*. Stuttgart, Tübingen (Cotta) 1867. Bd. 2, S. 72.